

今月の句

お寄せいただいた俳句と川柳をご紹介します。

竹林の 湯豆腐はこぶ 京ことば

仲の良い 夫婦も車間距離を置く

あくびした 途端に用を 忘れ去り

湯上りの 肌で答える 旅の秋

留袖の 躰取る日も 菊日和 〈元〉

おはようの 挨拶かわす 日々草

名月や 悠然とその位置を変え

天と地の はざまに我とこおろぎと

秋深し 別れの握手 熱かりし 〈幸〉

妻に手を とられて庭へ 今日の月

うすき雲 まとひて出でし 望の月

豆腐屋の 豆煮る匂ひ 後の月

月影の すっぱり包む 家の闇

爽やかに 友との時間 止めてけれ

老残を はやすごとくに 虫時雨

山城の 闇をそびらに 虫の闇

年寄りと 云はれたくなき 帰り花 〈成〉

かめが踊る 人形と 秋祭り

ろうそくの灯 あかりが点いた 笑顔の輪 〈満〉

たくさんの素敵な句を、ありがとうございました。
一つひとつの句に込められた想いがじんわり響きます。

「三つ葉しんぶん」は患者さん・ご家族と、三つ葉医師・スタッフの双方向通信です。

今月の一枚 スペシャル ～ 家で過ごす大切な時間

「三つ葉しんぶん」では、昨年の夏から毎月患者さんの素顔をご紹介してきました。たくさんの方にご協力いただき、さまざまの患者さんの生き様や暮らしについてお話をうかがいました。

ご高齢の方々の、日本が大変だった時代を乗り越えてこられた強さを感じました。そしていま、お家でそれぞれの時間を大切に生きる姿に触れることができ、私たちは多くのことを学びました。

今月は、スペシャル版として賑やかにご紹介したいと思います。

* * *

3年3か月にわたり発行してまいりました「三つ葉しんぶん」ですが、今月でいったん休刊させていただきます。

だくこととなりました。これまでご愛読いただきまして、ありがとうございました。

一人ひとりの患者さんが、ご家族や地域の人たちと安心して過ごせるように、三つ葉は日々改善を行っています。ニュースレターについても、患者さん・ご家族と、医師・スタッフがより豊かなコミュニケーションを取れるよう、装い新たなものを考えていきたいと思っております。それまでしばらく、お待ちください。

この「三つ葉しんぶん」は、以前に発行してまいりました「三つ葉だより」とともに、今後も従来どおり、三つ葉在宅クリニックのウェブサイトにて、PDFファイルでお読みいただくことができます。

● 掲示板 ●

インフルエンザの予防接種が始まります！

10月中旬より、インフルエンザの予防接種を開始します。既に予約受付を開始しておりますが、例年通り、ご希望の患者さんとその主介護者の方に、ワクチン接種を行います。

名古屋市の費用補助対象の方は、1,000円で受けていただけます。

※名古屋市の定期インフルエンザ予防接種補助

- ・名古屋市民であること
- ・接種日において満65歳以上の方
- ・接種日において満60歳以上65歳未満で、心臓・腎臓・呼吸器の障害で身体障害者手帳1級相当の方

◆予防接種対象者と費用

患者さんと主介護者1名

①名古屋市の定期インフルエンザ予防接種の

対象者 自己負担金：1,000円

②任意のインフルエンザ予防接種の希望者

自己負担金：3,000円

◆ご予約

訪問診療時に、接種希望をお聞きしています。

◆接種実施

平成26年10月15日～平成27年1月31日

の訪問診療時に実施します。

医療法人 三つ葉

三つ葉在宅クリニック

〒466-0015 名古屋市昭和区御器所通3-12

御器所ステーションビル3F

TEL 052-858-3281 FAX 052-858-3282

URL <http://www.mitsuba-clinic.jp>

三つ葉しんぶん係メールアドレス

tsubuyaki@mitsuba-clinic.jp



■ 私たちの理念

最高の在宅サービスを提供し
安心して暮らせる社会を創造する



三つ葉在宅クリニック

■ 安心を支えるために…

いつでも
お応えします

患者さんが
中心です

地域で
支えます

手を取り合って

松尾久一さんとはつよさんはとても仲の良いご夫婦です。風通しの良い洋間に介護ベッドが2つ、昼前はハの字型にほどよい距離をとって置かれ、夜には隣合って並びます。

ほぼベッド上で過ごす妻・はつよさんを介護するのは、自らも車椅子が必要な夫・久一さん。食事や排泄のケア、掃除・洗濯などをひとりビシッとこなす“恐るべき90歳”です（お嫁さん談）。

ご夫婦は若いころ南区に在住し、昭和34年の伊勢湾台風で大きな被害に遭いました。木造平屋の自宅は、近くにあった名鉄駅のホームによって、濁流とともに打ち寄せる材木の群れから辛うじて守られました。しかし、天井付近まで水没し、久一さんが3人の息子たちを必死で屋根まで引き上げ、一家は生き延びることができました。

それから54年。孫は7人、ひ孫は11人と家族に恵



まれ、いまは穏やかに夫婦の時間を過ごしています。久一さんが音頭をとり、ときどきご家族で温泉旅行をすることも。今年の秋は3世代7人で岩手まで行ってきました。

めざせ！東京五輪 2020

齊藤ナヲさんは、息子の仁さんがほぼ付きっきりで介護しています。10年ほど前から認知症となり、デイサービス等を利用していましたが、2011年秋に尿路感染症や心不全で70日間入院したのを機に、ほぼ寝たきりとなりました。

退院後しばらくは毎日看護師が訪問し、慣れない介護生活で仁さんも疲弊してしまいましたが、この一年ほどようやく落ち着きました。

齊藤家ではもともと食べ物には出費を惜しまない風土があります。ほとんど食べることができなくなったいまも、嚥下機能は保たれているナヲさんに「少しでも美味しいものを」とこだわりのりんごジュースやヨーグルト、お茶などをらくのみで毎日飲ませます。

「食べ物（飲み物）が美味しいといってくれるうちは、家に居させてあげたい」という仁さん。

— 男手一人の介護生活はたいへんじゃないですか？

「姉と妹がいるが、それぞれ舅姑がいる。母の面倒を見られる時間があつた自分は幸せ。いまこうして母と過ごせる時間を大切にしたい」と話します。

1920年生まれのナヲさんは、次の東京オリンピックが開かれる年にちょうど100歳。それまで一緒にがんばることが現在の母子の目標です。

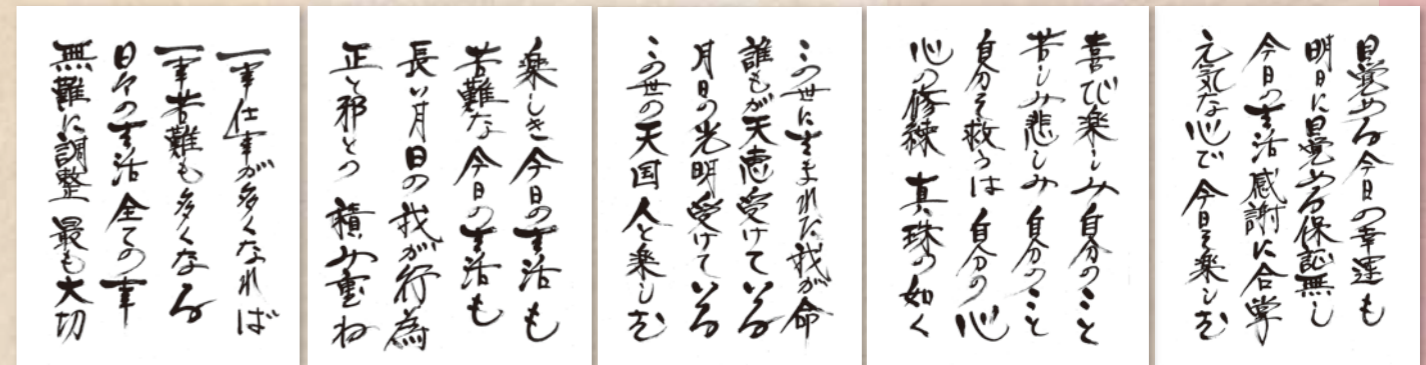


ナヲさんと仁さんはよく似ている。「入院したとき、自分と同じ顔の人間が苦しそうにしているのを見て辛かった。一生懸命生きようとしているのを見て、生かしてあげたいと思った」

この世の天国 人と楽しむ

西川喜世子さん(81歳)は、5年ほど前に脳こうそくで倒れ、ほぼ全介助の状態となりました。その介護を一手に引き受けるのが夫の勝衛さんです。妻が倒れた直後に自らにもがんが見つかり余命半年と告げられていましたが、「命がある限り介護に生きる」と甦りました。その妻を支える様子を、週1回ほど実家を訪れる娘の美代子さんは「父は母によって生かされている」と言います。

勝衛さんはしばしば、日ごろの想いをサラサラと、得意の書にしたためます。そこには一時一瞬を丁寧に生きる姿が浮かび上がります。



自由であることの愉しみ

武藤金吾さん(96歳)は40代のころから絵画を始めました。その理由は写真のカラー化。それまで自宅に暗室をつくり、フィルムを現像し手焼きしてモノクロ写真にこだわっていましたが、写真がカラーになったことで「面白味がなくなった」ので止め、それに比べて絵は「自由である」ことが気に入ったのだそうです。

還暦を迎えたころからは京都美術学校で堂本印象の弟子であった大嶽智弘氏を師として日本画を学び、ドライブに出かけた先の風景などを描いてきました。数々の絵がいまも季節ごとに寝室や居間の壁を飾っています。体力の弱った最近ではなかなか大きな絵を描くことはできませんが、気が向くと小さなスケッチブックに静物や仏像、ときには自画像を描くことも。

金吾さんは京都生まれ。名古屋に移った10代のころに建てられた築80年以上の古き佳き日本家屋に一人で暮らします。隣に住む息子さん夫婦に見守られ、毎日ケアチームの訪問を受けて、泌尿器系の持病を抱えながらも、自由に過ごせる日々を愉しんでいます。



大変細かい作業を伴う金箔づかいの画(左)。それにもう一度チャレンジしたいと、目を輝かせる金吾さん。

こだわりを捨てる^{いろ}と彩が見えてくる

小鹿基子(元湖)さんは、20年ほど前から俳句や川柳を習い、多くの句を詠んできました。表題の句には、元湖さんの生きる姿勢がストレートにあらわれます。

いつも感謝して生きる。頭を下げることを恥とは考えない。年が上だとか学歴があるとか、そんなことで上から目線にはならない。知ったかぶりは絶対にしない。

商人の家に育ち、大正生まれの女性としてはしっかりとした教育を受け、長らく料亭の女将として多くのお客様をもてなしてきた基子さん。息子たちの学校のPTAや地域の婦人会・老人会などの会長を務め、コミュニティ活動にもずっと積極的に関わってきました。常にポジティブで、どんなことにも好奇心旺盛だから、だれとでも打ち解けます。愚痴は言わず、他人の相談ごとには親身に耳を傾けてきました。

そんな基子さんと、同様に朗らかな夫・昭俊さんが、身内の失敗で大きな経済的打撃を受けたときには、二人の人柄や地域の人たちの繋がりが彼らを助けました。

多くを失ってもいつも周りに感謝し続けてきたご夫婦。良い終末期を迎えることを願って、いまも仲良く助け合って暮らしています。



身長差は約30センチ。若いころはよく二人でダンスを踊った。背の高い昭俊さんに合わせて、基子さんはいつも8センチヒールを履いていたそう。